
詩歌・小説の中のはきもの (第10回)

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

110 活動的に動きまわるには、低いかかとの靴、もしくはスニーカーのようなスポーツシューズはかかせない。疲れずどンドン歩ける自由と喜びがある。しかし所かまわずの、この手の靴の進軍となると、時には悲鳴をあげたい。機能性合理性ばかりでは人間生きてゆけないのである。足は大切。でもその上の脚のためにハイヒールをはくのは、女の別なよろこびがある。脚を人目にさらす行為は、腰も背中もまっすぐに伸ばさざるをえなくなり、スポーツシューズでは味わえないさっそうとしたすがすがしさである。

秦早穂子

★『おしゃれの平手打ち』から。若い女性のホンネはなかなか活字にならないが、製靴業者はホンネに敏感に反応し過ぎてしまうからそれでいいのだろう。しかし、日本のリーディングカンパニーだという自負を持つ企業は“やせ我慢”してもタテマエにこだわるべきだ。著者は「季節の変わるたび、いい靴を発見して、足もとに新しい風を吹きこみたい」と書いている。近頃はやりの言葉で言うところの“いい靴”に、本来、ホンネもタテマエも「あってはならないこと」であると頑なに信じたい。

111 きみはいま靴を脱いだのだ
充分きみを支えていると思っていた

その靴が
脱いでみれば
まことに他愛ないものだ
ほんとうに大地の上に
それで立っていたのか
世界中を
きみがそれで歩いてきたように
ある大きな存在が
きみという靴を穿いて
この宇宙を通過したのではないか
嵯峨信之

★『嵯峨信之詩集』の「時という靴」から。突然「お前は靴だ」と言われたら、誰だっぴっくりするだろう。靴にたとえられて肅然としたのはこれが初めての経験ではないが、「時という靴」なら、誰もが生まれた時から履かされるのだから納得できる。ひょっとすると人間は「ある大きな存在」（そんな存在が実在するとして）が履く半張りもできない靴なのかも知れない。だが、その大きな存在はそれほど他愛もない靴を履くものだろうか。自分にふさわしいしっかりとした靴を選んでいると信じたい。